

対話活動の進捗と今後の取り組みについて

対話は、まず「聴く」ことから

2026年3月27日
未来を選択する会議

私たちが目指すこと

対話は、まず「聴く」ことから

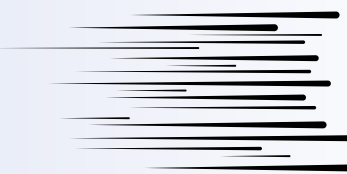
- 未来のことを一人ひとりが考え、選択していく。それが、私たち「未来を選択する会議」が目指していることです。
- そのために様々な情報の発信も大切です。しかし、特に若い世代や女性が未来を選択するためには、それだけでは十分ではありません。人口減少問題は、若い世代にとって、これからのライフスタイルや働き方の選択、つまり自らの奥深い意志に関わるテーマです。そうしたテーマを対話のテーブルに載せるためには、職場の会議のような議事進行や、あらかじめ答えが用意された選択肢型のヒアリングやアンケート調査は役立ちません。回答欄をすぐ埋められるような答えを誰も持っていないからです。
- 対話が成立する前提条件は、まずちゃんと聴くこと/聴かれることだと、私たちは考えています。それは相手の意見を予断なしに聴くことだけでなく、自分で自分自身の奥底から湧き上がる声に耳を傾ける、ということでもあります。そうした場が少ないことが、若い世代のそしてこの国の未来の選択を妨げている。私たちはそう考えています。
- 私たちが大切にしたいのは、そうした一見面倒に思える対話の場を丁寧に作ることです。ライフスタイルに関わる選択に向き合うためには、本音や迷い、言葉になるまでの気持ちなど、意見が形づくられていく過程を避けて通ることはできません。表面的に声を集めることではなく、安心して話せる関係の中で、その人自身もまだ気づいていない気持ちや考えに触れていくことです。
- 聴くこと/聴かれることには、人を支え、前へ進める力があります。人は安心して話せることで自分の気持ちや考えに気づき、他者とも深く関われるようになります。私たちは、この自分自身との関わり方と、他者との関わり方を丁寧に紡ぐ実践を「Slow Listening(スロースリスニング)」と呼ぶことにしました。
- 人が“対話”を通じて、互いに向き合い、信頼しあい、自分の気持ちを見つめ直しながら、納得感のある未来を選択していく。その積み重ねは、社会における信頼の土台になると、私たちは考えています。
- 「未来の選択」は一人ではできません。AIが進化する時代だからこそ、他者とともに考え、ともに選んでいくために、私たちはまず、聴く/聴かれる「関係性」の土台を社会に育てていきます。

なぜ今、「聴くこと」が全国で必要なのか

554名の応募・記録素材から見てきたのは、「早く答えを集めること」ではなく、「安心して話し、言葉になるまでともに探索できる関係」への強いニーズがありました。

スローリスニングとは

情報や結論を手早く引き出すための聴き方ではなく、言葉になるまでの迷いや過程を、ともに探索する聴き方。

ファストな聴き方	スローリスニング
	
• 答えを早く引き出す	• 言葉になるまでの過程を、ともに探索する
• 一方通行のヒアリング、アンケート、AIとの会話など	• 安心して話せる関係をつくる
• 効率的だが、迷いや揺らぎはこぼれやすい	• 気づきや関係性の変化まで支える

- 「ただ話したい、聞いてほしい、という思いが先にある」（広島県在住）
- 「属性でなく『その人』として話を聴かれることがない。社会的な役割や属性の中の自分で生きていると、本当に生きづらいと感じる。」（福岡県在住）
- 「『対話』によってもたらされる多くのこと（自己に対する気づき、癒し、やる気、仲間からの応援、勇気、アイデア、直感等）を目の当たりにしています。」（埼玉県在住）
- 「対話を学ぶ、実践する場の空白地帯がなくなることは、地域にとって成熟していく機会につながる」（鹿児島県在住）
- 「対話が変わると、人が変わり、関係性が変わり、組織や地域全体の空気すら変わると実感している」（茨城県在住）

他者との関係を育てていける「スローリスニング」が、地方創生や働き方改革等を進める全国の現場でも必要とされている。

全国に広げていくための3つの取り組み

見えてきた社会的ニーズと、各地にすでに存在する実践の芽を踏まえ、
私たちは「スローリスニング」による対話実践を全国に広げていくために、次の3つの取り組みを進めます。

①「対話ドキュメンタリー」を 制作・上映

- 「スローリスニング」により、対話の場で起きる変化を、体感的に伝えるドキュメンタリー映画を制作。個人の気づき、関係性の変化、そして社会変化の可能性を可視化。
- 映画上映に加え、「スローリスニング」の考え方を学び、自地域で活かすためのセミナー/ワークショップと組み合わせて各地での対話実践のきっかけをつくる。次年度から全国各地で展開予定。

2026年6月17日（水）
東京にて試写会開催予定。

②「スローリスニング」人財の 全国での育成に着手

- 「スローリスニング」を実践する人財の育成を開始。
（企業の組織開発の経験者等を中心に対象者を募り、育成に着手（※））
- 次年度は、育成プログラムを実施するとともに、各地の既存実践者とも連携し、実践者ネットワークを育てていく。

（※）募集結果について
全都道府県・幅広い年代から554名の応募があり（募集期間：5日間）、地域における「スローリスニング」への高い関心と必要性が示された。全国各地で地方創生や働き方改革を進める上でも重要。

③地方で対話実践を ともに育てる

- 複数地域で、地域が主役となって「スローリスニング」を活かした対話実践に取り組む。
- そうした機会が、コミュニティや人々の関わり方、社会の「当たり前」の変化につながるかを丁寧に検証する。
- その上で、各地の実践から得られた示唆を、社会に根づく新しい仕組みへとつなげていく。

【参考】「対話ドキュメンタリー映画」について

「スローリスニング」により、対話の場で起きる変化を、体感的に伝えるドキュメンタリー映画。
個人の気づき、関係性の変化、そして社会変化の可能性を可視化した
約70分間のドキュメンタリー。



あらすじ

「人口減少」をテーマに、年齢、性別、居住地、立場が異なる5名の市民がある施設に集められる。
2100年の悲観的な未来予測を前に、彼らはそれぞれの「属性」や「カテゴリー」の代表として議論を試みるが、噛み合わず、その場には分断と沈黙が広がる。

参加者たちはファシリテーターの提案を受け、
互いの人生の物語に耳を傾け始める。
そこで語られるのは、幼き日の原体験や、心の深い部分に抱える痛み、そして未来への願い。
参加者たちは自ら「聴き手」となり、互いの背景にある事実や想いを知り、「認知的共感」を獲得していく。
深い相互理解を得た5人が、
再び「未来に向けた対話」を始めるまでの変容を描く。

世代・性別を超えた相互理解と「社会規範の共同アップデート・意見変容・行動変容」が生じた